
冥府の王は恋を謳う

桧崎マオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥府の王は恋を謳う

【Nコード】

N6781T

【作者名】

桧崎マオ

【あらすじ】

過去のクーデターによって王政から軍事力に依る独裁政権となつた欧州の小国、ブルーメンタール共和国。共和国總統の子息であり、共和国軍總司令官のユリウス・アドラー元帥が来日することとなつた。通訳専門の派遣社員である四ノ宮歌恋【しのみや かれん】はユリウスが日本に滞在している間の通訳兼現地秘書として破格の待遇で雇われることになるが？

Prologue

どこからか、遠い処から声が聞こえてくる。
「王妃陛下、貴女の夫君である国王陛下はたつた今、お亡くなりになりました」

まだ年若い、少年と青年の端境にある男の凜とした声が鼓膜を刺激する。だが、水晶を打ち鳴らすかのように澄んだ、その声音とは裏腹に、男の紡ぐ言葉の内容はどこまでも冷徹で残酷なものだった。
「処刑したのです。この私が」

冷やかに告げられた言葉に女の押し殺した噁り泣きが聞こえる。まだ年若い男が王妃陛下と呼んだ女性のものだろうか。愛する夫を殺された、その絶望と悲しみは、あまりに深く、そして痛みとなって、聞いている歌恋の心を刺した。

……ああ、また、この夢だ。

目覚める少し前の微睡みの、あのふわふわとした温かい感覚の中で、歌恋はぼんやりと考えている。ミルク色の柔らかい光だけが視界を包む、画像のない音だけの夢。幼い時から何度か見てきたそれは、決まって目の醒める直前の一時に、歌恋の意識にするりと滑り込んでくるのだ。

「王妃陛下、貴女は祖国に帰ることを赦しましょう。私の父もそれを望まれております。外国人である貴女を処刑したとあつては、貴女の国も黙つてはおりますまい。ですが……」

ふと、男は口を噤む。一呼吸の後、継いだ言葉は壊れたオーディオのように、ぐにやりと音声が歪み、遠くなる。

……ダガ、オウジョデンカハ。

「止めて下さい！ それだけは嫌です！ 止めて！！」

王妃陛下と呼ばれた女性の半狂乱の叫び声と、壊れたテープの音を無理矢理に再生させたかのような、ぐにやぐにやとした不快な音。それらがかぶさり、ごちゃ混ぜになる。映像のない音だけ

の歌恋の夢の世界は、もはや音の洪水だけとなって揺さ振られる。

やがて、深く暗い水底から水面に浮かび上がるように、意識がゆっくりと現実の世界に引き揚げられて行く。そして目の醒める間際、これまで柔らかいミルク色の光だけが包んでいた視界は、不意に突き落とされるように暗転し、代わって鮮烈なヴィジョンが暗闇の中に浮かび上がった。

夜の帳を思わせる漆黒の髪に、まるで見る者の魂を引き込んでしまふようなほどに深く澄んだダークブルーの眼差し、濃いグリーンの軍服に包まれた、一五・六の美しい青年であった。彼こそが、先程の音声だけの夢の中、王妃陛下という女性に、どこまでも冷酷な言葉を投げつけた主に違いない。

だが、大理石の彫像を思わせるほどに完璧な造形を象る、その貌は、ただの飾り物のように美しい、というだけのものではない。何者も寄せ付けないほどに冷徹で威圧的で、一瞬でも気を抜けば彼の纏う空気だけで歌恋の呼吸など止められてしまいそうだ。

……死を司る、王。

子供の頃に読んだ神話の、漠然としたイメージが頭を過ぎる。そんな歌恋に向かって、対峙する青年は人差し指を真っ直ぐに突き付ける。

これは、歌恋の夢の中だ。名も知らぬ、見知らぬこの青年と同じ時間を、場所を共有してはいないはずの　　ただ、夢を見ているだけの歌恋に向かって、若く美しい冥府の王は冷徹な声で、こう宣べるのだ。

「だが、王家の血を引く、その王女殿下は殺されねばなりません」

ジリリリリリリリリリ

！

喧しい目覚まし時計のアラーム音が鳴り響く中で、眠りに閉ざされていた瞼が、はっと見開かれた。見開いた焦茶色の大きな瞳は、柔らかく温かい羽毛のブランケットの中で暫し瞬き、寝惚けた焦点を定まらせようと努力する。やがて、ぼやけた視界が見慣れた自分の部屋の天井のクロスを認識したところで、ようやく歌恋は自身が夢から現実の世界に戻ってきたことを確認する。

「……また、あの夢」

眠りの名残にこめかみが疼くのを堪えながら歌恋は小さく溜息を吐き、ベッドの中で身を起こした。寝汗のせいで額に張り付く、柔らかい焦茶の髪房を掻き上げ、歌恋は枕元で自己主張する目覚まし時計のアラームを切った。時刻を示す時計の針は朝の六時を五分ほど回ったところだった。

「歌恋、起きてるか？ かれーん？」

なかなか鳴り止まない目覚ましのアラームに心配したのか、ドアの外から呼び掛けてくる叔父の、くぐもった声が聞こえてくる。

「大丈夫よ、起きてるわ。檀叔父さん」

ドアの向こうに応えながら歌恋はベッドを下りた。傍らの机に視線を走らせると、昨夜遅くまで目を通していた資料の束が視界に入ってくる。

『ブルーメンタール共和国軍総司令官 ユリウス・アドラー元帥
についての覚書』

ブルーメンタール共和国の公用語でもあるドイツ語で書かれた資料の頁を、ぱらぱらと捲る指先にも自然と力が籠もってくる。歌恋は深呼吸をひとつとして緊張を解した。

来日するユリウス・アドラー元帥の日本滞在中の通訳と秘書

彼女、四ノ宮歌恋しのみや かねんには今日から大きな仕事が控えていた。

青き花咲く谷 愛しき君よ
 花は散れど 我が愛は
 永久に 朽ちせじ……………。

幼い頃に亡くなった母親は鈴の音の鳴るような声で、よくこの歌を口ずさんでいた。遠い、どこかの国に伝わる古詩を日本語に訳したという民謡 車窓の外で流れていく景色の色彩をぼんやり眺めながら、小さく口ずさんでいた歌恋の詞が不意に途切れたのは、赤信号の前で急ブレーキをかけられたパジェロの大きな車体が、軽く前のめりに傾いだせいだ。

「なあ、歌恋。本当に大丈夫なのか？」

右隣の運転席でハンドルを握る叔父の檀が心配そうに問い掛けてくる。その意図の見えない歌恋は「何が？」と問い返した。

「その……………今日からの仕事。ブルーなんたらって国の軍人の通訳」「ブルーメンタール共和国軍総司令官、ユリウス・アドラー元帥閣下」

澱みのない歌恋の答えは、小さな女の子が覚えたばかりの言葉を得意気に大人に教える風にも似ていて、檀は抱きかかえるようにして寄り掛かったハンドルの上に顎を乗せると、無精髭風に手入れされた口許を拗ねたように、への字に歪めた。つい最近、40歳の誕生日を迎えたことをひどく気にしていた檀だが、そんな子供じみた態度は彼を実年齢よりもはるかに年若いものに見せる。

骨太い線を描く面輪を肩先までラフに伸ばした、くすんだ栗色の髪が縁取る。助手席から見る歌恋の叔父の横顔は、コンチネンタルスタイルに生やした髭も相俟ってワイルドな風貌ではあるが、眉間から鼻先まで通った高い鼻梁や削ぎ落としたような頬のラインのせ

いで、どこか近寄りがたい気難しさを感じさせた。……下がり気味の眦に、少し眠そうに垂れた瞼、その下に覗く眼差しの湛える飄々とした色が、四ノ宮檀の、そんな先鋭的な印象を、やや和らがせてはくれているが。

「住み込みつてのが気に食わないんだよなア……」

フロントガラスの向こう、朝の路を急ぎ、横断歩道を忙しく行き交う人々の波を眺めながら、檀はハンドルに凭れた姿勢のまま溜息混じりにぼやいた。呆れたように歌恋は黒いスーツに包まれた肩を軽く竦めてみせる。

「また始まった、檀叔父さんの心配性」

「保護者として当たり前だ、心配して何が悪い」

肩先まで伸ばした、くすんだ栗色の髪　陽の光に透けると金にも見えるそれを、後ろに掻き上げながら檀は憮然と応える。

「お前がフリーの通訳者を目指して頑張ってるのは知ってるし、これが大事な仕事だっていうのも解ってるさ。だが、お年頃の可愛い姪っ子を持つ叔父さんとしてはだな、嫁入り前の娘が何日も家を空けるなんて色々心配なわけだ」

「その代わりお給料は物凄くいいのよ？　ざっといつもの四倍くらい。何よりもアドラー元帥お抱えの三ツ星シェフのご飯三食、スイーツ付き！」

「そついう問題じゃなくて　」

両拳を握り、三ツ星シェフのくだりで目をキラキラさせる歌恋に、言いかけた檀の言葉が途切れたのは、後続の車からクラクションを軽く鳴らされたためだ。いつの間にか横断帯の人の波は引き、前方の信号は青に変わっていた。いけね、と小さく呟いて檀はアクセルを踏んだ。

フリーの通訳者として独立するために、学生時代からボランティアやアルバイトで様々な通訳や翻訳の仕事をこなしてきた歌恋であったが、今回の仕事の応募条件のひとつが叔父の不機嫌の理由でもある『住み込み』であった。早朝や深夜にアドラー元帥が急に動く

時にも対応をして欲しいということ、また何よりもセキュリティや機密保守の観点から、なるべく部外者の出入りを最小限にしたいというブルーメンター側意向で提示された条件であった。

ハンドルを捌く檀の眉間には、知らず知らずのうちに深い皺が刻まれている。

「二人きりの家族なんだから、まあ、せめて仕事を引き受ける前に、俺に一言相談は欲しかったな」

「ごめんなさい、檀叔父さん。私もまさか通ると思ってたなかったから……」

眉根を寄せて、歌恋は戸惑ったように謝罪の言葉を口にする。

少なくとも当初はこんな話ではなかった。登録している派遣会社の、岩瀬という人の好い担当営業から頭を下げられ、こう言われたくらいなのだ。四ノ宮さん、ダメモトで応募して頂けませんかと。

今回の、ユリウス・アドラー元帥の日本滞在中の通訳兼現地秘書という仕事の応募には市場力の高い大手派遣会社が何社も競合しており、必然的に採用の競争率も高くなっていったわけだが、通訳・翻訳専門という看板を売りにしている以上、歌恋の登録する競争力の弱い中小系派遣会社としては負け戦と解ついても自社スタッフに応募させなければならぬ。そういう事情を汲んで欲しいと、歌恋は説明を受けていた。いつもお世話になっている担当の岩瀬の頼みだし、と軽い気持ちで承諾した歌恋であったが、それが書類選考だけで、奇跡のような今回の採用通知である。

興奮のあまり日本語の崩壊した岩瀬からの電話を貰った時には、驚きのあまり、その場にへたり込んでしまったくらいだ。これまで大なり小なりの通訳や翻訳の仕事をこなしてきたが、非公式とは言え海外の要人の通訳などと、これまでの歌恋のキャリアから考えると途方もなく大きな仕事であった。

「今回はマグレかもしれないけど、でも、こうなったからには頑張るわ。私にとってはキャリアアップのチャンスだし、それにもう一人別に採用されてる人がフリーのベテラン通訳者だって聞い

てるから、色々話も聞いてみたいし」

自分に言い聞かせるように力強く言葉を宣べる歌恋に、そうだな、と小さく相槌を打った檀だが、その表情は未だに苦々しいままだ。

檀がハンドルを切り、パジェロを左折させると、フロントガラスの向こうにユリウス・アドラーが来日の間、滞在する高級ホテル・ペニンシュラの概観が目に入ってきた。

「……うつつ、緊張してきたなあ」

「ホラ、あと五分くらいで着くぞ。今のうちに深呼吸でもしとけよ、そう言われてペットボトルのミネラルウォーターを口に含んだり、指を組んで某かの神様にお祈りしたりと、助手席で俄にそわそわし始めた姪を横目に一瞥して、檀は苦笑する。

「歌恋、俺の上着の左ポケット」

「へっ?」

「探してみる、いいものが入ってるから」

お祈りを続けていた歌恋は、右隣の檀からの不意の言葉に緊張で青くなった顔をその方に向けた。髭に覆われた顎先を軽くしゃくつてみせるゼスチュアに促されて、歌恋は邪魔にならないように手を伸ばし、檀の羽織る黒革のジャケットの左ポケットをまさぐった。

ひやりとした感触が歌恋の指先に当たる。

「亡くなったお前の母親が俺に預けていたものだ。お守り代わりに持って行け」

前方を見据えたままハンドルを握る叔父の、殊更ぶっきらぼうに告げる言葉を受けて、歌恋がポケットから取り出したそれは、白金の指輪をネックレスチェーンに通したものであった。

「……お母さんの……」

言葉を詰まらせながらも、歌恋が掌の窪みで揺るように転がしてみると、指輪は思った以上の重みで、その存在を主張する。一粒だけ埋め込まれたオーバルカットの青い石はサファイアだろうか。

一見してシンプルな造りの指輪だが、平打ちの表面には気の遠くなるような繊細さで、複雑に絡まり合った小さな花や蔦の紋様が宝石

の周囲を包むように丹念に刻まれている。派手さはないが、熟練の職人の手によって創り上げられたものだということは、宝飾に明るくない歌恋にも容易に想像ができた。

幼稚園に上がる前に亡くなった母親の記憶は、近いようで遠い。母が遺してくれたのは、いつも口ずさんでいた歌だけだと思っていた歌恋にとつては、思わぬ贈り物であったし、何よりも。

「お前が分別のつく年頃になったら渡して欲しいと、亡くなった茉莉花姉さんからは、そう頼まれていた。今この時が渡すタイミングで正しいのは、俺には解らんが……」

何よりも叔父、檀の温かい心遣いが歌恋には嬉しかった。今回のことを諸手を挙げて賛成してくれているわけではないものの、初めての大仕事を前に落ち着かない歌恋を心配してくれている。だからこそ、このタイミングで母の形見の指輪という、大切なものを渡してくれたのだ。

「檀叔父さん、ありがとうございます」

「礼は、茉莉花姉さんに言ってくれ。俺は預かっていただけだ」

緊張に強ばらせていた顔を、ふわりと綻ばせて礼を述べる歌恋。

曇天の隙間からお日様が顔を覗かせるような、そんな笑顔に照れたのか、檀は軽く顎を引き、バツが悪そうに鼻下を擦った。

二人を乗せたパジエロの車体は、ほどなくしてホテル・ペニンシユラの手前の路肩に止められる。

「着いたぞ。時間は充分間に合ったよな？」

エンジンを止め、運転席から下りる檀を後目に、歌恋は手にしているネックレスチェーンを首に掛けた。白金の冷たい感触を肌の上に残して滑り降りていく指輪は、堅苦しい黒スーツの中に潜り込み、ちよつど心臓の辺りで落ち着く。それは胸肌に触れるうちに体温と同化し、心地よい温もりを与えて歌恋を安心させた。さつきまで緊張の鎖が体中を雁字搦めに支配していたのが嘘のようだ。

ひとりじゃない。この『お守り』があるから、私はきつと大丈夫。

よしつ、と気合いを入れて助手席のドアを開けると歌恋はパジエ口の外に出た。雲ひとつない抜けるように青い空の下では初夏の柔らかい風がふわりと舞い、緑の盛り始めた街路樹の葉を、かさかさと言を立てて揺らす。

ハザードランプの点滅するパジエ口の傍らでは、既に後部座席からキャリーケースとボストンバッグを引つ張り出した檀が姪を待っていた。梢の間を擦り抜ける風に、なぶられる髪を掻き上げる、その表情は今生の別れというわけでもないのに随分と物憂げだ。

「そんなに心配することないじゃない。ほんの二週間くらいなんだし」

手にした荷物を受け取りながら、くすりと微笑う歌恋に、檀は言い難そうに、もそもそと口を開いた。

「いいか、歌恋。お前は派遣社員で、仕事はあくまで、そのアドラ―元帥とやらの通訳と現地秘書だ……その、変な接待とか言われたら断るんだぞ」

「なにそれ。檀叔父さん、テレビとかの見過ぎ？」

いきなり何を言い出すのかと思えば、これだ。溜息混じり、サイテーと小さく呟いてドン退く歌恋に、檀は頭二つ分ほど低い位置にある姪の鼻先に指を突き付けて言い募る。

「冗談じゃないんだぞ！ 仕事とか地位を嵩に何かされそうになったら俺にすぐ連絡して来い。国際問題とかそんなのは俺には関係ないからな！ いいか、絶対だぞ！！」

「解ったわよ、もう。檀叔父さんたら変な心配しないでよ！」

「まったく、檀叔父さんたらぶち壊し！ サイアク！！」

歌恋は内心で憮然とする。これでは、さつき渡してくれた母の形見の指輪の感動や、叔父への感謝が台無しだ。ぶんすか頬を膨らませて、そっぽを向いた歌恋だが、その頭の上に不意に載せられる大きな掌。その重みの反動に、わっ、と思わず声を上げて歌恋は面を俯けた。

「言いたいことはそれだけだ。……あとは、まあ……元気でやって

こい」

温かい情愛に満ちたそれは、背中までストレートに伸びた歌恋のダークブラウンの髪を、主の性格同様の不器用さでもって、くしゃくしゃと掻き混ぜる。

「そういう檀叔父さんこそ、私のいない間、気を付けてよ？ ちゃんとご飯食べて、煙草も控えめにね。仕事終わって帰ったら家がぐちゃぐちゃなんて、私、イヤなんだから」

「……お前ね、俺を何だと思ってるわけ？」

「手にかかる心配性の叔父さん」

歌恋の母・茉莉花が亡くなってからは、その弟であった檀が姪の歌恋を引き取って育ててくれたが、叔父というよりは、歳の離れた兄と言った方が感覚は近いかもしれない。

掌の下、伏せていた顔を上げて歌恋は背の高い檀を上目遣いに一瞥すると、擲掬かうように、べえっと舌を出してみせた。

ふわりと風が流れる。

「なるべく連絡するから。心配しないで、檀叔父さん」

辺りの街路樹が、さわさわと葉擦れの騒めきをたてる中、歌恋は居心地の良い叔父の掌から一步退くと小鳥が飛び立つように身を翻した。だが数歩行った所で、何かを思い出したように、ふと歩みを止め、肩に掛けたボストンバッグを持ち直しながら檀の方を顧みる。

「じゃ、行ってきます」

そろそろきつくなり始めた初夏の陽射しの下で、そう言って軽く手を振ってみせた歌恋。その背中まで伸ばしたダークブラウンの髪を、ふわりと広げて、吹き抜ける初夏の風が柔らかく遊んだ。

車道を隔てて反対側に聳え立つ幾何学的な建物に向かって遠離っ

ていく歌恋の後ろ姿を見送りながら、四ノ宮檀は路肩に駐車したパジェロの車体に身を凭せかけると、姪を送って行く仕事を終えた後の一服、懐から取り出したラッキーストライクを一本銜え、火を点けた。

それから視線だけを左右に走らせる。ブルーメンタール共和国軍総司令官ユリウス・アドラー元帥の滞在するホテル・ペニンシユラ周辺に、目立たないようにではあるが自国から随行してきた警備兵が配置されているのを確認して、紫煙とともに言葉を吐き出した。

「……随分と、大仰なんだな」

その頃、ホテル正門脇の階段に辿り着いた歌恋は、荷物を載せたキャリーケースのキャスターを急な段差に引っ掛けて苦戦していた。持ち手を握り、キャリーケースを引っ張り上げようと、うんうん唸っていた歌恋であったが、階の上から「何用ですか」と、掛けられる声に面を上げる。聞こえてきた男の声音を構成する言語はドイツ語　ブルーメンタール共和国の公用語であった。

「あ…あの、私、今日からユリウス・アドラー元帥の通訳として派遣されてきた、四ノ宮歌恋と言います」

咄嗟にドイツ語で、そう応えた歌恋であったが、それは訊ねてくる男の口調が誰何のそれに近い、鋭いものであったせいもある。淀みなく同じ言語で応えてきた歌恋に、銀髪に近いプラチナブロンドを短く刈り込んだダークスーツ姿の壮年の男は踊り場から階を下りながら、得心したように軽く頷いてみせた。

「失礼、フロイライン。私はアドラー閣下の警護を担当している者です。すぐにも確認を取りますので少々お待ちいただけますか？」

無線で二・三の遣り取りを交わす片手間に、男は歌恋が散々引き揚げるのを難儀していたキャリーケースを頬の筋肉ひとつ動かすでもなく、片手で、ひよいと難なく持ち上げてみせたのである。

驚いたように目を瞬かせる歌恋を余所に、無線での確認を終えたらしい、ダークスーツの男は改めて歌恋に向き直り、礼を取る。

「フロイライン・カレン・シノミヤ。アドラー元帥閣下の副官に確

認が取れました。応接室までご案内するようにとの指示を受けましたので、こちらにどうぞ」

慇懃な言い様ではあるが、アドラー元帥の警護の担当だと言っている彼には、大勢の人間を指揮することに慣れた立場の者特有の威圧感が感じられた。

きつとすごく偉い人なんだろうなあ、と。漠然と考えながら歌恋は自分よりも随分と背の高い、目の男を凝視めた。胸の辺りの位置から見上げてくる、そんな真つ直ぐな眼差しに男は微かに鼻白んだようである。継ぎの言葉を発するまでに妙な一拍があつた。

「……既にお聞き及びかと思いますが、閣下へのお目通りの前に貴女のお荷物をこちらで一旦預からせて頂きますが、よろしいでしょうか」

「はい、結構です」

許可の形こそ取ってはいるが、歌恋の意志を訊ねているわけではないことは重々承知している。持ってきた荷物のうち、キャリアケースは既に男の手の中にある。もうひとつ、肩に掛けていたボストンバッグも手渡そうとした歌恋であつたが、その際に男から思わぬ質問を投げ掛けられたのである。

「それからセキュリティの関係上、お聞かせ頂きたいのですが、貴女を車で送ってきた男性はどういう方でしょうか？」

「……え……っ？」

まるで鋭いナイフの刃のようだ。目の前の男の、この季節の新緑と同じ色でありながら、冷たく斬りつけるエヴァグリーンの眼差しは、歌恋の肩越し　車道を隔てて数十メートル向こうに佇む叔父、檀の姿を捉えていたのである。

「……え？　あ、あれは一緒に住んでいる私の叔父ですが……」

アドラー元帥の滞在するホテルに入ったら、最初にセキュリティチェックのために手荷物を預かれるということは、派遣会社の担当者から説明を受けていた。だが、単に送ってくれただけの叔父の身元についてまで確認を取られるとは想像が至らず、軽い驚きに歌

恋は答える声を上擦らせた。

戸惑う歌恋を斜に一瞥しながら、男は無線を通して近場にいる部下に指示を下す。姪であるという彼女への配慮から、必要な言葉のみに限定して。

「尋問だけだ」

物々しい雰囲気は車道を隔てていても伝わってくる。既に何本目かを数える、新しい煙草を燻らせながら四ノ宮檀は、ふん、と鼻を鳴らした。警備はよほど嚴重なようである。

ホテルに行き着くまでの階段の途中で現れた、ブルーメンタール軍の警備兵らしきダークスーツ姿の男と歌恋の遣り取りの様子を遠目に眺めていた檀であったが、眠そうに眦の下がった目を、すうつと眇め、紫煙を吐き出した。

可愛い姪っ子がホテル・ペニンシュラの、建物の中に姿を消すまで見送るつもりだったが、そういうわけにもいかなかったようだ。歌恋というダークスーツ姿の男 恐らくは、階級はかなり上の警備兵であろう彼から、指示を受けたのだろう。グレーのスーツに身を包んだ警備兵と思いき別の男が近付いてくるのを、檀は視界の端に捉えた。

凭せ掛けていたパジェロの車体から徐に身を離す。近付いてくる警備兵に気付かない風を装って、飄々とした動作、紫煙の立ち上るラッキーストライクを銜えたまま檀はパジェロの運転席に身を滑り込ませた。

そこに、ちょうど近付いてきたグレーのスーツ姿の男と檀の視線がフロントガラス越しにかち合い。

「ブルーメンタール共和国の方とお見受けいたしますが、よろしいでしょうか？」

両者の間に横たわっていた緊張の弦は、ハイヒールの音を高く響かせて現れた女性の、凜とした声によって断ち切られた。思わぬ処で、しかも母国の公用語で声を掛けられて、パジェロの車体に間近にまで迫って来ていた警備兵は、一瞬、そちらに気を取られてしま

う。

「私、桐島千咲と申します。ユリウス・アドラー元帥閣下の通訳として今日から雇われている者ですが」

横から割り込んできた女の言葉を聞き流しながら、その隙に檀はキーを回し、エンジンを蒸かした。上司からの指示を疎かにしてしまつようになつてしまった、グレースーツ姿の警備兵が慌てるのを後目に、檀はアクセルを踏み、怪しまれない程度の緩やかさでパジエロを発車させる。

「……頼むぜ」

険しい視線でフロントガラスの向こうを見据えながら誰にともない呟きを漏らすと、四ノ宮檀は、まだ随分と吸う余地の残っていた煙草を灰皿に押し当てた。

「いつまで待たせるのかしらね」

誰に聞かせるともない眩きに、アースカラーのシックなソファに腰を下ろした歌恋は、自分が責められているわけでもないのに困ったように肩を締め、眉根を寄せた。

歌恋と、それに少し遅れる形で姿を見せたもう一人の通訳者

桐島千咲のふたりはユリウス・アドラー元帥の警護を担当する男の案内で、応接用に充てられている、このデラックススイートに通されたのだが、暫く待つようになると言われてから既に一時間近く経過している。

目の前のテーブルに置かれている、ブルーローズの絵付けがされた白磁のカップをソーサーごと手に取ると、歌恋は中に満たされた褐色の液体を一口啜った。少し温くはなっていたが、上質のコーヒー豆の芳しい香りが鼻孔を撩る。

後で檀叔父さんに連絡しなくちゃ……。

先程はタイミング良く檀が帰ったのと、叔父への説明不足を歌恋がブルーメンタールの警備兵に謝罪したことで大事にならずに済んだが、叔父には歌恋の認識が甘かったことの事訳が必要だろう。

携帯は最初に預けた手荷物の中に入っているが、自分たちが待たされているのと同様に、こちらもすぐに返して貰えそうな気配はない。

手にしたコーヒークップをソーサーに乗せると、ちりんと、磁器同士が軽く触れ合う硬質の音が微かに響く。小さく溜息を吐く歌恋であったが、斜の位置のソファから不意に向けられた桐島の何か言いたげな視線に気付いて慌てて言い募る。

「あ、いえ。お預けした荷物、なかなか返していただけないなあと思つて」

「……貴女ねえ」

秀麗な額に落ちかかるマニッシュなショートボブの髪を掻き上げながら、桐島は呆れたような声音で応える。

「二週間とは言え、私たちはブルーメンタール共和国という一国家の中枢に関わるのよ？ 部外者の手荷物検査に時間がかかるのは当然じゃないの」

それは桐島のベテランの通訳者としての経験から発せられた言葉ではあったが、涼やかに切れた眦の、目縁を覆う長い睫の下から覗く黒目がちの大きな瞳は、侮りの色を湛えて歌恋の不見識を睥睨する。

本日何度目かの失敗に叱られた子供のように小さく項垂れる歌恋。だが、何よりもモカ・サテンのタイトスカートから、すらりと伸びた綺麗な長い脚を組み替える桐島の豊満な肢体と、それが織り成す仕種のひとつひとつが成熟した女性の自信というものに溢れており、幼さの抜けきらない歌恋に引け目のようなものを感じさせるには充分であった。

手にしたままであった空の白磁のコーヒークップを静かにテーブルに戻す歌恋に、桐島は、ふと思いついたように問いを投げ掛けた。

「四ノ宮さんだったわね。貴女、今回の仕事は派遣社員として来るんですって？」

「あ、はい」

「今回の貴女の話、私たちフリーランスの間じゃ、ちょっとした話題になつてるのよね。書類選考だけで通った優秀な通訳がいるって」
「ああ、と曖昧に相槌を打つ以外に術のない歌恋であったが、あまり好意的な言われ方をされていないであろうことは桐島の口振りからも察することができる。

「どんなに高スキル、高キャリアの人でもね、随分厳しい審査や面接を何度も受けさせられたのよ。成績や経験、マナーを問われるのは当然だけど身辺調査までされたし。だから、そういうのを全部パスで採用されたって一体どんな人が来るのかと思つたら」

そこまで言つて、不意に桐島は口を噤んだ。綺麗に描いた眉を軽く顰め、興味が失せたと言つように歌恋から視線を外す。腰を下ろしているソファの背凭れに肘をかけて頬杖を付く桐島が、それ以上を語ることはなかったが、その犀利な横顔が見せる表情から途切れた言葉の先は訊かずとも大体想像が付く。

私なんかと一緒にされるの、イヤなんだろうな。

仕事も始まる前、それも初対面で、いきなり突き放された歌恋は、しょんぼりと頂垂れた。

知的な雰囲気の漂う、モデルを思わせるような歴然たる美人であり、歌恋が、いつかなりたいと目指しているフリーの通訳者、それである桐島千咲は目の前の派遣社員のことなど歯牙にもかけていないようである。

……仕方ない、か。そう内心で淋しく独りごちて歌恋は視線を外の景色に向ける。

一番に目に入ってくるのは、空だ。遙か彼方にまで広がる天幕の雲ひとつない初夏の陽光に煌めくセルリアンブルーの眩しさに歌恋は思わず目を細めた。そして、その空に向かって聳え立つ高層ビルの群れと、それを取り巻く街の森の緑。手が届かないくらいに高いと、いつもは見上げていただけのそれらが今は歌恋の視界の下にある。

先程の桐島の話は歌恋にとって初めて聞く話であった。確かに自分は書類選考だけで今回の仕事を採用になったということを派遣会社の担当者から聞いてはいたが、他の採用については、かなり厳しい選考審査が設けられていたようだ。桐島のような、キャリアもスキルも歌恋など足許にも及ばない通訳者は他にもいた筈である。一体どういう基準で、しかも書類選考のみで自分は採用されたのか

ガラス張りのリビングルームをぐるりと取り囲む二階からの眺望は、自身が受けている待遇のあまりの釣り合いのなさと同俟って歌恋をますます落ち着かない気持ちにさせた。

無意識のうちに歌恋は胸元に手を当てる。淡く伏せた睫の翳りに

ダークブラウンの眼差しを沈め、叔父から貰ったばかりの母の形見の指輪にスーツの上から触れながら。

ユリウス・アドラー元帥って、どんな人なんだろう。

自分にはどこか不釣り合いな感のある今回の仕事、その雇い主である人物について歌恋は思いを馳せる。

何しろ、今回のアドラー元帥の来日は随分と急に決まった非公式のものということで、外務省や大使館といった正式なルートから彼に関する資料が殆ど手に入らなかったという事情もある。歌恋の手許にあるアドラー元帥に関する覚書も、個人ルートで何とか体裁が整う程度に掻き集めたものだと言われ、派遣会社の担当営業の岩瀬からは説明を受けていた。

そもそもブルーメンタール共和国という国自体、歌恋は今回の仕事の話で初めて知った国である。地図でも目を凝らしてようやく見付けることができるような欧州の小さな国で、中世時代のドイツ地方に割拠していた荘園国家のひとつを起源としており、国の歴史は古い。

元の国名は『ブルーメンタール公国』であったそうだが、二〇年前の軍事クーデターで君主制が廃されてから共和制へと移行し、国名も現在のものに変更された。このクーデターは表向き、隣国との小競り合いに端を発した国境問題に消極的な態度を見せた国王に、熱狂的ナショナリズムに浮かされた軍部が暴発したことになっていくが、事実、この問題を利用して影で糸を引き、軍部を指嚇していたのは、当時の國務大臣であったデイトリツヒ・アドラーと、そして彼の子息であり、当時十八歳にして国王を警護する親衛隊少尉の地位にあったユリウス・アドラーであった。

このクーデターで国王は処刑され、王妃と幼い王女も国外への逃亡の途中で行方知れずとなり、事故死したとも暗殺されたとも言われている。デイトリツヒは事件の沈静化を図るとして、また国王、王妃の不在を理由に非常時の暫定的な地位である『統領』に就任するが、その後の出来事は、歴史上ではよくある話である。

当時からデイトリツヒ・アドラーが『花の谷の荒鷲』と綽名され、また、一部では猛禽とも評されていたのは、彼の本質を見抜いたものであったのだろうか。デイトリツヒはクーデター沈静後もそのまま統領の座を退くこともなく、その専横に反対する人々、またはクーデター以降うやむやになっていた王政の復活を望む王党派の運動を弾圧、肅正した。国名を公国から共和国へと名ばかりを変え、暫定の職務であった筈の統領から、今や、デイトリツヒ・アドラー『終身総統』に就任し、権力と言う名の魔物に取り憑かれた彼は現在に至るまで独裁政治を布いているのである。

以上が派遣会社から渡された資料と、歌恋自身が図書館やインターネットなどで調べた情報を総合してのブルーメンタールに関する概要である。だがブルーメンタール共和国は現在、デイトリツヒの下、情報統制が布かれているという事情から、これらの情報は珠樹・キースリングなる在ブルーメンタールの日本人女性ジャーナリストにして王党派の運動家でもあった人物が二〇年前に書いた、いくつかの小さな告発記事が元となっているため、真偽のほどや正確さについては定かではないのだが。

そして、そのデイトリツヒ・アドラー総統の右腕的存在として軍部を掌握するのが、今回来日する子息のユリウス・アドラー、その人である。若年より政戦両略の知謀に長け、その冷徹さでもって父親の覇業を影から補佐したと言われている。現在はブルーメンタール共和国軍を統括する総司令官の地位にあり、国内で元帥の階級を持つ唯一の軍人であった。

現在三八歳と言うから、歌恋の叔父、檀と変わらないくらいの年齢だ。だが。

「随分難しい顔をしてるのね」

不意に掛けられた声に、歌恋は、はつとなる。思索の海に漂っていた意識を現実へと引き戻されて、歌恋が慌ててその方に視線を向けると、アースカラーのソファの背凭れに片手で頼杖ついている桐島千咲の眼差しと、かち合った。

「あの、桐島さん」

また怒られちゃうかなあ……。そう思いながらも歌恋は背筋を伸ばし、大きく息を吸い込むと、思い切って桐島に訊いてみることにした。

「桐島さんは、ユリウス・アドラー元帥の顔をご存知ですか？」

写真とか、ブルーメンタール側から何かアドラー元帥の外見の資料を頂けたりしました？」

「……いいえ、知らないわ」

歌恋の唐突な質問の意味を咀嚼するための一拍だろうが、僅かな間を置いて桐島は苦笑混じりに答えながらショートボブの頭を振った。

「写真は頂けなかったわね。何でもアドラー元帥は写真を撮られるのがとてもお嫌いだからって話で　でも、その質問じゃ貴女も私と同じみただけど？」

歌恋が派遣会社から渡された覚書の中にユリウス・アドラーの写真はなかった。派遣会社の営業担当からもそれは手に入らなかったと言われ、桐島が先程言ったと同じ理由を聞かされている。

雇い主の顔を知らないのは、歌恋だけでなく桐島も同様のようだ。歌恋が小さく頷いたところで　被さるようなタイミング、来訪者を告げるデラックススイートのチャイム音が聞こえてくる。

「失礼いたします」

ブルーメンタールの公用語であるドイツ語を紡ぐ柔らかな声音。程なくして歌恋と桐島のいるリビングルームに姿を現したのは、深い赤褐色の髪と銀灰色の眼差しが印象的な、穏和な面差しの男であった。黒い軍服に身を包んだ男は、ふたりの現地通訳を前に軍人らしく踵を鳴らしてブルーメンタールの軍礼を取ると、その堅い仕種にはそぐわないような柔らかい口調で、こう宣べたのである。

「お待ちせいたしました、フロイライン・クリシマ、フロイライン・シノミヤ。私はエルネスト・ヴィンクラー。ブルーメンタール共和国軍総司令官、ユリウス・アドラー元帥閣下の副官を務めておりま

す」

「閣下は、つい先程まで日本駐在員の者と打ち合わせをしております、予定が長引いてしまつて大変申し訳ありません」

「いいえ、とんでもありませんわ。ヴィンクラー閣下」

遅くなつた謝辞を述べるヴィンクラーに、桐島千咲はソファから、すつと立ち上がり、そつなく答えた。慌ててそれに倣う歌恋だが、高級なソファの、ふわふわと座り心地の良過ぎるクッションが仇になつて立ち上がった拍子に足許をふらつかせてしまふ。

「ヴィンクラーで結構です。私達は共にアドラー元帥閣下の下で働く身ですから……。お二人とも今日から我々が日本に滞在する二週間、どうかよろしく願ひいたします」

「了解致しました。では、ヴィンクラー様、こちらこそよろしくお願ひいたします」

伸べられてきたヴィンクラーの手は、先ずは当然ながら堂に入つた受け答えをする桐島へ、それから所在なげな歌恋へと向けられ、それぞれ握手を交わす。誠実な内面の顕れであるう、森の陽溜まりを思わせるような、静かで柔らかい空気を纏うヴィンクラーは軍服を着ていなければ小学校の先生といった風情すら漂う。だが握手を交わした掌は、その外見からは想像も付かないほどに厚い筋肉が巻いており、歴戦の軍人らしい堅く引き締まつたものであつた。

ヴィンクラーの掌の、思わぬ力の強さに軽く驚いて視線を上げる歌恋。だが、綺麗に撫でつけた赤褐色の髪の下、歌恋の姿を映したヴィンクラーの銀灰色の瞳が、ほんの一瞬、僅かな感情の波に揺ら

めいたのは気のせいか。

「では、アドラー閣下の元へご案内致します。こちらへ……」

ささくれ立ったもので刺激されるような、正体の解らない微かな感覚を巧く説明する術を歌恋は持つてはいなかった。軽い戸惑いを感じながらも、だが、ヴィンクラーに促されてリビングを後にする頃には歌恋の中でその感覚はよくある勘違い、ただの気のせいというものにすり替わっていた。

ホワイエを抜けると、ヴィンクラーは部屋の外には出ず、パウダールームの脇に設けられた連絡口へと歌恋と桐島を導いた。ドアノブに備え付いたセキュリティキーの暗証番号のボタンを押して連絡口のドアを開くと、「どうぞ」と二人の女性を先に通す。

どうやら、ここは隣の客室のようだ。好奇心いっぱいを目を輝かせてきよるきよるする歌恋であったが、苛々とした咳払いとともに桐島に睨まれてしまい、ばつ悪く身体を縮こまらせた。

「応接用のデラックススイートから、この一部屋を挟んで隣にもう一室、閣下の執務用に同じデラックススイートを繋いでおります。

お二人にはこの連絡路は何かと利用して頂くことになると思いますので……ふたつのドアの暗証番号はまた後ほどお伝えします」

ヴィンクラーはそう説明しながら、次いで反対側、ユリウス・アドラーの執務室に宛てられているデラックススイートのドアに向かった。先程と同じようにドアノブのセキュリティキーの暗証番号を弾くと、ピピピッと軽快な電子音とともにロックの解除される音が響く。

これもまた、セキュリティと機密保持の観点からということなのだろうが、叔父の檀と狭い賃貸マンションで慎ましく暮らしている歌恋には驚くことばかりである。随分贅沢な通路だと落ち着かなく思いながら歌恋は、応接室と執務室の間に挟まれた形になる一部屋（それでも充分過ぎる設備と広さのグランドデラックスルームなのである）を通り抜け、執務室に繋がるドアを潜った。

その瞬間、煎れたてのコーヒーの、ほろ苦く芳しい香りが、

ふわりと包み込むように歌恋たちを出迎える。先導するヴィンクラ
ーの後に続いて歌恋と桐島は、先程まで自分たちがいた応接用のデ
ラックススイートと同じ構造のリビングルームへと足を踏み入れた。
ヴィンクラーが部屋の主に向かって軍礼を執る。

「アドラー元帥閣下、通訳の方をお連れいたしました」

最初に目に入ってくるのはガラス張りの壁面に映える眩しいセル
リアンブルー、歌恋が眺めていたと同じ初夏の陽光に煌めく空の色
だ。整然と重ねられた書類の束と開いたノートパソコン、白磁のコ
ーヒーカップが置かれたスタイリッシュなデザインのビジネスステ
ールを隔てた向こう、空のカンバスに描かれた高層ビルの群れを背
景に男がひとり、黒い軍服に包まれた背を此方に向けて佇んでいた。
「御苦勞、ヴィンクラー」

え……っ？

副官を労う言葉を発した男の声音に歌恋は軽く瞠目する。思わぬ
驚きの、ために。

……王妃陛下、貴女の夫君である国王陛下はたった今、お亡くな
りになりました……処刑したのです。この私が……王妃陛下、貴女
は祖国に帰ることを赦しましょう。私の父もそれを望まれておりま
す。外国人である貴女を処刑したとあつては、貴女の国も黙つては
おりません。ですが……。

一言一句違うことなく憶えている。不意に、歌恋の記憶の泉底か
ら湧き上がってきたのは『彼』の酷薄な言葉、それらを紡ぐ玲瓏た
るあの声だ。子供の頃から何度も繰り返して視てきた、そして今朝も
また視たばかりのあの夢に現れる、死を司る王のような美しい青年
の声音と。そして今、目前に在るブルーメンタール共和国軍総
司令官である男の声音とは、年齢による深みが若干加わっているだ
けで同じもののように歌恋には聞こえたのである。

……そんな、まさか。

数メートルの距離を置いて在る、アドラー元帥と呼び掛けられた
男の広い背を凝視したまま、歌恋は心臓の鼓動の跳ね上がる音を聞

いていた。これまで感じていた、自身のキャリアには分不相応で過分な仕事を与えられたことに對する緊張とはまた性質の違う、混乱と疑問とが緋い交ぜになったそのために。落ち着かせようと吸い込んだ筈の空気も喉奥で、ひゅうつと無様な音を立てるだけだ。

「ブルーメンタール共和国へ、ようこそ」

そんな歌恋を余所に、男は、眼前に広がる眺望から視線を外すと悠然と振り返った。

「短い期間ではあるが貴女達には日本と、そして我がブルーメンタール共和国の国益のためにしっかりと働いて頂きたい」

異相と言つべきか。何よりも眼を引くのは男の左眼を覆う黒革の眼帯であった。それは最高級の大理石を造作したかのような白皙の美貌に翳りとなって纏い付き、また、隻眼とは言え、心の奥底までも射抜くような炯々たる光彩を湛えたダークブルーの右の眼差しと相俟つて、彼の軍人としての精悍さと、そして人を畏怖と崇敬を集めて止まない冥き神性を一際引き立たせていた。

……死を司る王だわ。

歌恋の、そのダークブラウンの大きな瞳は瞬きすることすら忘れてしまったかのように真っ直ぐにユリウス・アドラー元帥の事前に外見に関する資料も写真も貰えず、今日初めて顔を合わせる筈の人物の姿を映し出す。だが歌恋は初めて見える目の前の男から、いつもの夢の中で対峙する美しい青年の面影を感じ取っていたのである。

「桐島千咲と申します。お目に掛かれて光栄ですわ、アドラー元帥閣下」

いつしか歩を進めてきたユリウスが、隣に立つ桐島と握手を交わすのを歌恋は別世界の出来事のように眺めている。次いで、自分に向けて伸べられてきたユリウスの右手に歌恋は、のろのろと面を上げた。

この人は、いつあの言葉を言うのだろう。真っ直ぐに私を指差して呪文のように。。。

(だが、王家の血を引く、その王女殿下は殺されねばなりません)

「……四ノ宮さん！」

「きゃああっ！ はっ、はいっ！！！」

心此処に在らずといった様子の歌恋を叱責する桐島の、苦々しい
声音。不意に現実に戻されて、思わず上げた歌恋の場違いな悲
鳴のような返事にユリウス・アドラーの手が一瞬、硬直する。

瞼を伏せ、怒りにこめかみをぴくぴく震わせている桐島、ヴィン
クラーは面映ゆいように頬を緩め、そしてユリウス・アドラーは不
思議な生き物を見るような眼差しで頭二つ分ほど高い位置から歌恋
を見下ろしている。三人三様の態度にようやく自分の置かれている
状況に気付いた歌恋は気恥ずかしさに頭にかあつと血を上らせ、熟
れたトマトのように耳まで真っ赤に染めた。

「……え、あつ、あのつ。失礼しました。四ノ宮歌恋です。よろし
くお願いいたします！」

デラックススイートの広いリビングルームに困惑したような微妙
な空気が流れ、歌恋は、はっとなって口許を押さえた。日本語で言
ってしまったのだ。慌ててブルーメンタールの公用語であるドイツ
語で言い直し、改めてユリウスと気まずい握手を交わした所で、副
官であるエルネスト・ヴィンクラーが咳払いをひとつ。助け船を出
すように今後の予定について説明を始める。

「では早速ですが、本日十二時より非公式ですが外務省の方をお招
きして、昼食会を行うことになっております。その席での通訳をま
ずはお願いしたい」

「そのお仕事、是非私にお任せ頂けませんか。アドラー元帥閣下」
豊かな胸元に手を当て、軽く腰を折りながら請願する桐島であっ
たが、ユリウスは即答を避け、踵を返した。

「その件については後ほど打ち合わせを　　ヴィンクラー、外に
控えているバルテル少将に連絡を。預かっていたお二人の荷物をお
返しするように」

「かしこまりました」

ヴィンクラーが携帯無線で指示を伝える、その傍らで歌恋は、ビジネスデスクの前の椅子を引き、優雅に腰を下ろすユリウス・アドラーの姿を視線で追った。

「フロイライン・キリシマ、フロイライン・シノミヤ。先に貴女達をそれぞれの部屋に案内させよう。今が丁度十時だ、三〇分もあれば準備に問題はないかね？」

「充分ですわ、閣下」

「よろしい、では十時半にまたこの執務室に来たまえ。先程の昼食会の打ち合わせはその時に」

桐島の返事を受けて小さく頷きながらユリウスは、手にした書類に視線を落とす。

夜の闇を……否、それよりも更に深淵の闇を思わせる射干玉の髪綺麗に撫でつけられたその一房が秀麗な額に、はらりと落ち掛かるのをユリウスはさり気ない仕種、右手で掻き上げる。左眼を覆い隠す黒革の眼帯は彼の外貌に禍々しいまでの翳りを落としながら、だが、その端麗さは些かも損なわれることがなく、むしろ灼き付くほどに鮮やかな印象を見る者全てに与える。

人は生きるために温かい太陽の光に焦がれながら、反面、深き安寧をもたらず死の闇に惹かれるものだ。彼、ユリウス・アドラーのカリスマ性は明らかに後者に属するものであった。

……私は、この人を……ユリウス・アドラー元帥を、知っている？

胸裡に確信めいたものを抱きながら、だがその根拠が、子供の時から視ている『夢』などという曖昧なもののために、歌恋は今ひとつ自分に自信が持てないでいた。そもそも今回の仕事の話がなければユリウス・アドラーという人物のことも、ブルーメンタール共和国という国家の存在も知らないままであっただろう。歌恋のこれまでの人生の中で接点などひとつも見出せない、それほどに遠い国、遠い存在なのである。

だが、眼前にいる彼、ユリウス・アドラーは今にもあの言葉を宣

べそうな、そんな気がした。あの夢の中のように真つ直ぐ歌恋を指差し、水晶を打ち鳴らすかのような玲瓏たる声で。

（だが、王家の血を引く、その王女殿下は殺されねばなりません）
「フロイライン・シノミヤか。どうかしたかね？」

文字通り穴が空くほど不躰に自分を見詰める歌恋の、ダークブラウンの眼差しに気付いたのである。徐にユリウスは書類から視線を上げ、歌恋に問うた。その口調は無礼を咎めているという質のものではなかったが、ユリウスの右の眼窩に詰め込まれた、さながら真夜中の蒼闇を凝縮したかのようなダークブルーの瞳、隻眼ながら惹き込まれそうになるほどの力を持ったそれに息が詰まりそうになりながら歌恋は慌てて頭を下げた。本日、何度目かの謝罪の言葉を口にしながら。

「い、いえ、失礼いたしました！ アドラー元帥閣下」

落ち着いた色調で統一された廊下の、床面に張られた毛足の長い絨毯は歩を進めていく者の重みを受け止めて、その靴音を柔らかく吸収する。ふわふわ綿の海を踏みしめるような感覚に、列の後ろについていく四ノ宮歌恋は不思議そうに足許を見回していた。

「このフロアは我々の滞在中は貸し切りになっており、関係者以外は立入禁止となっています」

執務室を退出した後、宛われた部屋へと案内されている歌恋と桐島であったが、ふたりを先導しているのはユリウス・アドラー元帥の警護責任者であるニコラウス・バルテル少将　ペニンシュラ前の階段で難儀をしていた歌恋の手荷物を引き揚げてくれた、あのダークスーツ姿の男であった。

「それでは、差詰めここは日本でありながらブルームエンタール共和国領であると、そういう解釈でよろしいですかしら、バルテル様」

背中越しに投げ掛けられる桐島の追従に顧みることも、表情を崩すこともなくバルテルは小さく頷くだけで応えてみせた。穏やかで人当たりの好い小学校の教師のような副官のヴィンクラーとはまたタイプが違う。要件を簡潔に述べるバルテルは軍人然として、謹厳で隙がなく、ふたりの通訳者を部屋まで案内するという『任務』を黙々とこなす様はダークスーツに包まれた逞しい体躯とも相俟って玄武岩のように堅く、重い。

「外出をされる場合は私がヴィンクラー少将に行き先と要件、帰着時間を伝えてから出るよう、お願いします。その際にはID証をお忘れにならないように……」

淡々と告げながら廊下に表示された案内プレートに従って角を左に曲がると、バルテルは三つ目のドアの前で足を止め、初めて歌恋と桐島の方を振り返った。

「こちらがおふたりの部屋になります。二一五がフロイライン・

キリシマ、向かいの二一六がフロイライン・シノミヤとなります」
バルテル『少将』って、やっぱり偉い人だったんだ。

各々の部屋のカードキーを受け取りながら、歌恋は先程、自分を
手助けしてくれた男を改めて見返した。

北欧系の血が入っているのであろう、バルテルはユリウスやヴィ
ンクラーに較べて肌の色素が一際薄い。それにも増して、厳冬の夜
の冴えた月光を思わせるプラチナブロンドに、鮮やかな初夏の新緑
のようなエヴァグリーンの双眸はナイフの刃光りにも似た鋭い光彩
を湛えて、より一層冷厳な印象をバルテルに与えている。

そんな歌恋の、頭ふたつ分ほど低い位置から真っ直ぐに見上げて
くるダークブラウンの眼差しに気付いたバルテルは妙な一拍を置いて
咳払いすると再び説明のための口を開いた。ホテルの前の階段で
歌恋を前にした時と同様の奇妙な居心地の悪さを再び感じながら。

「……お預かりしていた荷物は、それぞれのお部屋に運んでおりま
す」

「どう思う」

その頃、執務室では、ユリウス・アドラーがビジネスデスクを挟
んで向かいに立つエルネスト・ヴィンクラーに短い問いを投げ掛け
ていた。目を通している書類に視線を留めたままでの問い掛けでは

あつたが、長年副官を務め、士官学校時代からの親友でもある男は、ただそれだけでブルーメンタール共和国軍総司令官の意図を正確に理解している。

「事前に調査をしていた通り、きちんとした教育と躰を受けた、ごく一般的な家庭のお嬢さんという印象です」

リビングからホワイエへと繋がるドアに、ちらと視線を走らせてヴィンクラーは銀灰色の瞳を細めた。ドアの、その更に向こう、退出したばかりのふたりの通訳者たちを透かし見ようとするかのよう

に。
「今春、国立外語大学を次席卒業、現在二十二歳とのことですが、年齢の割には幼い……少女のようです。通訳者としてのスキルは高いようですが、どうにも落ち着きがない。ここに来るまでも桐島女史に何度も窘められておりました」

僅かな時間ではあつたが、接触した『彼女』についてヴィンクラーは簡潔に評する。

高級ホテルの豪華な設備を前にして心を浮つかせ、何か目新しい物を見付けては目を輝かせる。その度に彼女は桐島に窘められて、叱られた子犬のように、しょんぼりと頂垂れていた。子供っぽくて落ち着きがないとは言いながらも、それでもくるくる変わる表情と無邪気な好奇心の光に溢れたダークブラウンの瞳は決して不快な印象を与えるものではなかったし、背中までストレートに伸ばしたダークブラウンの綺麗な髪が縁取る面輪には未だに幼さが色濃く残るが、その未成熟な美しさと清楚な佇まいはブルーメンタールの古詞にも謳われる、短い春の間、野に咲く小さな青い花を思い起こさせた。

青き花咲く谷 愛しき君よ

花は散れど 我が愛は

永久に 朽ちせじ……。

「……よく似ておられます。ブルーメンタールの真珠とも白百合マムシ・シリーとも讃えられたマリカ王妃に。そして、先のクーデターで我々が処刑したジークフリード王に」

「それだけか？」

副官の独白めいた言葉にさしたる感慨を示した風もないユリウスであったが、手にした書類に視線を留めたままの蒼闇色の隻眼には冥い焰の揺らめきにも似た光が灯る。ヴィンクラーはユリウスに向き直ると佇まいを正し、表情と口調を改めた。

「ユリウス様、このようなことをする必要が本当にあったのでしょうか？」

この赤褐色の髪と銀灰色の瞳が印象的な穏和な副官は、二〇年前のクーデターに際して、国務大臣であった父・ディートリッヒの陰謀の一翼を担っていたユリウス・アドラーに絶対的な忠誠を誓って以来の無二の腹心であった。そして士官学生時代からの得難い親友として、共和国軍総司令官であり元帥位にある上官をプライベートではファーストネームで呼ぶただ一人の男である。

そんなヴィンクラーが口にしたのは、今回の来日を前にして何度となくユリウスに具申してきた忌憚のない箴言であった。

「彼女の存在そのものが現在の我が国にとって火種にしかありません。幸い彼女は自身について何も知らない様子です……それに先程、咄嗟に出た言語は日本語でした。このままこの国に同化したものとして捨て置いてもよろしいのではないですか？」

咄嗟の際、無意識に口をついて出る言語がその人間の母国語であると言われる。実際、先ほどユリウスと初めて引き合わされた彼女が緊張のあまり思わず口走ったのはブルーメンタールの公用語であるドイツ語ではなく日本語であった。ヴィンクラーは、それを論拠に指摘しているのだ。

もはや『彼女』は、この国での暮らしに溶け込んだ日本人である

のだと。

「彼女への接触については私は最初から反対でしたが、今一度お考え直し下さい。総統閣下が病に臥せられたタイミングを計ったかのように国内の王党派が『クーデター以降行方不明であった王女が生きている』と騒ぎ立てております。国民が動揺している現在にあつて、四ノ宮歌恋……いえ、ブルーメンタール公国の最後の姫君たるカレリナ・イングリートを監視下に置き、場合によっては暗殺などと……！」

「総統閣下が、父上がそう望まれているのだ」

腹心としての忠誠心、そして何よりも親友の行く末を純粹に案じるが故に感情の波にうねるヴィンクラーの忠言を遮ったのは、何物をも寄せ付けることを赦さぬかのような冷厳たるユリウスの言葉であつた。

ユリウスは視線を滑らせるだけ、内容など見てもいない書類を静かにビジネスデスクの上に置いた。

「知っているか、ヴィンクラー。王という存在には何種類かあるぞうだ。かつてのブルーメンタール公国時代のように代々世襲で王となる者、私の父のように実力で権力を奪い取つて王となる者、そして、生まれついでての王たる者」

デスクの上に肘をつき、両手を思案気に組み合わせながら、著名な国家政略論の一節を引用するユリウスの、水晶を打ち鳴らすかのような玲瓏たる声が質の良いコーヒーの香りの揺蕩う執務室の空気を圧する。

「王の星の下に生まれた者は自ずと王となる。本人が望むと望まないに拘わらずな」

「四ノ宮歌恋　カレリナ姫がそうであるか？」

「可能性は大いにある」

右の隻眼を細め、蒼闇色の瞳に宿る眼光をより一層鋭いものとするユリウスを前に、ヴィンクラーは溜息混じりに赤褐色の頭を緩く振つた。

「……私には解りかねます」

確かに彼女は、美丈夫と誉れ高かった最期のブルーメンタール国王、ジークフリード・カレリアヌスと、清廉な美しさに輝いていたマリカ王妃の息女なのだ。あと何年かすれば可憐な野花は大輪の薔薇となつて美しく咲き誇るであろうことは想像に難くない。

だが、今の彼女はブルーメンタール王家の血を引いているだけ、ただそれだけの存在に過ぎない。ごく幼い頃、カレリナ・イングリート内親王として生きていた時代の片鱗は彼女には見出せず、ブルーメンタールから遠く離れた東洋の片隅で何も知らないまま、平凡だが幸せな生活を送っている小さな子供のような彼女に一体何ができるというのかと、ヴィンクラーは思う。……否、そうであつて欲しいと心のどこかで願っている。

不安定である現在のブルーメンタールの政情に、そしてユリウス・アドラーの人生に　今更に彼女を関わらせることがあつてはならない。そして、殊更にそれらを彼女の血の色に染める必要など、どこにもない筈だ。

「『カレリナ姫』であれば暗殺の必要もありません。ですが、私を見る限り、目の前に立っていた彼女は『四ノ宮歌恋』という、ごく普通の少女でした」

「……彼女が何たるか、お前が気付いた頃には色々と手遅れになっているだろうな。もし父上であれば、あの娘を即刻処刑しろとご命じになる」

片頬を皮肉の笑みに歪め、親友であり副官たる男に軽口を叩くユリウスであつたが、なおもヴィンクラーは苦い物を吐き出すかのようにつける。

「その命令は二〇年前に既にディートリツヒ総統閣下より下されておりました。お忘れですか？　我々は……ユリウス様も、そして私自身も、それを遂行できなかったことを」

ヴィンクラーの言葉を受け止めながらユリウスは座していた席を静かに立つと、リビングを取り巻くガラス張りの壁に歩を進めた。

クリスタルガラスの向こうに広がるのは鮮やかなセルリアンブルーの天幕　　寒冷な気候ゆえに春夏が短く、鉛色の雪雲が低く垂れ込めている時季が長いブルームエンタールではあまり見られない空の色だ。

エルネスト・ヴィンクラーは決して忠誠心篤いだけの無能な男ではない。この副官の下す冷静な判断と忌憚のない意見、勇敢な働きぶりには幾度となく助けられてきたし、そしておよそ軍人らしくない小学校の教師のような柔和な風貌と人当たりの好さに隠れがちではあるが、時にはヴィンクラーは道徳と権謀を秤にかけ、必要とあらば陰の部分や血腥い部分を彼自身が担うことも厭わない苛烈な一面を持ち併せていることもユリウスは重々承知している。

ところが、そのヴィンクラーがどういうわけか彼女を捨て置けと意見する。根底には二〇年前のクーデターの際に下された彼女の処刑命令を遂行できなかったことへの後ろめたさが多分にあるのだから、自身の出自を何も知らず、幸せに暮らしている無力な少女であるからという、どこまでも主観的な理由だけで彼女の暗殺に難色を示している。いつ何時、アドラー親子の独裁体制に反対する国内の王党派が、ブルームエンタール王家最期の姫君たる彼女を正統な統治者として担ぎ出し、共和国の根幹を揺るがす存在となり得るともしれないにも拘わらず、である。

ヴィンクラーは本当に気付いていないのか。罪悪感、同情心、好意、庇護欲。どんな形であれ、ほんの僅かな時間で他者を無意識のうちに関心の内側に取り込んでしまう。それこそがユリウスの警戒する、彼女の、王の星の下に生まれた者としての資質のひとつであるということに。

長らく沈黙に封ざっていた硬質の唇を開き、ユリウスは独白めいた呟きを零す。

「写真嫌いななどと下らぬ理由を付けて、ふたりの通訳者に私の写真を与えなかったのは初対面での反応を見るためだ。だが、あの四ノ宮歌恋の見せた反応は普通の小娘が見せるものではなかった」

初対面の人間、特に妙齡の女性であれば、隻眼であるユリウスの異相を前にして驚いた様子を見せるか、または禁忌に触れてしまったかのように目を逸らすかのどちらかが大抵の反応である。だが彼女、四ノ宮歌恋は違った。真実を映し出す泉のように澄んだダークブラウンの瞳にユリウスの姿を映して、彼女は真っ直ぐに、ただ凝視していた。……二〇年前、自分を殺めようとした男を凝視めたと同じ眼差しで。

彼女は自身の出自について何も知らない、それはヴィンクラーも指摘した通りだ。当時二歳であった彼女がユリウスを明確に憶えているとも思えない。だが、彼女の深い水底までも窺い知るかのごとくに穢れない、その眼差しは心の奥底までも透かし視る魔力でもあるのか、声なき言葉をユリウスに投げ掛けてくるのだ。

私は貴方を知っているのだ、と。

「……荒鷲^{アドラー}はプロセルピナに全てを奪われる、か」

向き合うクリスタルガラスの中、ユリウスの影が、端麗な口許を自嘲の笑みに歪めて黒革の眼帯の上に指を辿らせるのをヴィンクラは凝然と見ている。それは喪われた左の眼であった。二〇年前のあの時に。

「父上も老いたものだ。何十年も昔の、胡散臭い占星術師とやらの下らぬ戯れ言を今更に恐れるなどと」

プロセルピナとはローマ神話に登場する女神にして、死を司る王冥王神プルトの妃である。ギリシア神話のペルセフォネーと同一視される冥府を統べる女王であり、また春と豊饒を司る女神でもあり、多神教を否定するキリスト教に於いては女悪魔の長とも位置付けられているが、果たして彼女は父、デイトリツヒ・アドラーの恐れるプロセルピナと為りうる存在であるのか。そして、そのプロセルピナは荒鷲^{アドラー}にとって春の女神となるか、死の女王となるか。

クリスタルガラスの壁の向こうに広がる天空の、至高の蒼。ユリウスの、闇に溶け込んだ蒼の右眼は質の異なる同じ色を映して陰し

く細められた。感傷の時間は終わったのだ、ユリウスは決然と口を開く。

「この後の外務省との食事会での通訳は、四ノ宮歌恋に任せる」

外の景色に目を向けたままの隻眼の元帥に、ヴィンクラーは意見を投げ掛ける。

「食事会での通訳には、桐島女史が名乗りを挙げておりましたが？」

「下らんな、見え透いている」

興がないがゆえの素っ気なさではない。氷の針を潜ませたかのようなユリウスの返答にヴィンクラーは僅かに眉を顰めた。

四ノ宮歌恋と共に雇われた、もうひとりの通訳者である桐島千咲。確かに彼女の態度には上昇志向のある女性特有の剥き出しの野心のようなものが感じ取れたが、これまでヴィンクラーが数多く見てきた露骨な形で権力者に阿る女性の類からすれば、まともな部類に入る。冷淡過ぎるユリウスの答えにはそれを倦んでいるのとは別の成分が含まれていると、長年の勘からヴィンクラーは感じ取ったのである。

尤も、性別を問わず阿諛追従や下品な媚びの類には、全く関心を示したことはないユリウスではあったが。

「しかし外務省の出席者の中には南雲蓮太郎なぐも れんたろう参事官の名もございましたが、よろしいのですか」

日本の外務省官僚の名前をヴィンクラーが口にすると、ユリウスは肩越しにその方を顧みた。何か言いかけたユリウスであったが、そこに割り込むように執務室への来訪者を告げるチャイムの音がリビングに響く。

ふたりの通訳者の部屋の案内を終え、報告のために立ち寄ったニコラウス・バルテル少将であった。ほどなくして二人の前に精悍な姿を見せた警護責任者の男はユリウスを前に踵を鳴らし、ブルーメンターの軍礼を執る。

「御苦労だった、バルテル少将。報告して貰おうか」

ユリウスに促されたバルテルが無言のうちにダークスーツのポケ

ツトから取り出したものは、コイン大ほどの金属製の箱であった。無造作に三つほど、バルテルの無骨な掌に載ったそれにユリウスはさしたる興味も示さなかった。盗聴器に隠しカメラ、そう言ったものが仕掛けられるのは予想の範疇であったからだ。

「すべて四ノ宮歌恋の荷物の中から発見されたものです」

「電波の発信源は突き止められたか？」

「いえ」

ユリウスの問いにバルテルは短く答える。盗聴器をこちらに気付かれたことを察知した発信源が逆探知をかける前に電波を打ち切ったのである。今は回路を切断して、機能することのなくなった、ただの金属の塊をバルテルはビジネスデスクの上に静かに置いた。

恐らくこれらは最初から発見されるのを前提に仕掛けられた囷の盗聴器である。バルテルは口にこそ出さなかったが、そう考えていた。バルテルは静かに口を開く。

「……失礼ながら、アドラー元帥閣下。あの四ノ宮歌恋という少女は何者ですか」

ニコラウス・バルテルは本来、無駄口を叩くタイプの男ではない。余計な口出しはせず、上からの命令を静かに、かつ確実にこなしていく。その謹厳な様は厚い信頼を寄せられている反面、気易く口もきけないほどに近寄り難い雰囲気醸し出しており、鋭利な刃物のような外貌も相俟って萎縮する者も少なくはない。そんなバルテルの投げ掛けた思わぬ問いに、傍らで控える副官のヴェンクラーは興味深くユリウスの警護責任者の男を見遣った。

「この盗聴器に隠しカメラは尋常ではありません。それに彼女を送りにきていた叔父という人物ですが、あれは軍人としての私の勘で申しますと」

「フロイライン・シノミヤのことが気になるかね、バルテル少将」

どうやらユリウスもヴェンクラーと同じ感想を抱いていたようだ。珍しく詮索を入れてくるバルテルをユリウスは揶揄めいた口調で遮る。『彼女』の存在については極秘事項であり、今回来日したブル

「メンターの人間の中でも事実を知っているのはユリウスとヴィンクラーだけなのである。」

隻眼の美貌の元帥に鄭重に頭を下げながら、バルテルは続けた。

「……何と言いますか、変わったフロイラインです。私を前に物怖じも、萎縮もしない。そして、子供のよう綺麗な目をしています」

現時点でバルテルは、ユリウス・アドラーの日本滞在中の警護責任の任にあるが、本国では共和国憲兵隊副總監の要職に在る男である。辣腕で以て鳴る憲兵副總監の声音には微かな困惑の色が滲んでおり、ユリウスは端麗な口許に苦笑を刷いた。

「バルテル、君には私の警護とは別に任務を与える」

如何にユリウスが総司令官、元帥と、ブルーメンター共和国軍の軍人としては最高の地位にあるとは言え、その護衛に当たらせるだけの任であれば、わざわざ憲兵副總監の要職にあるバルテルを随行させるまでもない。ユリウス自身の護身の技量は疑いようがなかったし、何よりも腕利きの副官が常に傍らに控えているのだから。

ユリウスがバルテルを随員のひとりに選んだ理由は別の処にある。

「四ノ宮歌恋、あの娘について気付いたことを報告して貰う」

「……？」

真意が解らないというように僅かに眉根を寄せたバルテルであったが、ユリウスは構わず続けた。

「言い方を変えよう、バルテル少将。君本来の職務を全うしてもらう。今後、四ノ宮歌恋から目を離すな。外出する場合はその行き先と目的を確認し、彼女に接触する者があれば、その身元を調べ、仔細漏らさず私に報告するように」

場合によっては少しばかり荒事になるかもしれないが、そう言葉を引き結んだ、共和国軍総司令官をバルテルは身動きもせず、真っ直ぐに見据える。その右のみの、蒼闇色の瞳に宿る険しい光彩は、この命令が冗談でも間違いでないことを如実に物語っていた。この命令の対象が政治犯やテロリストと言った不穏分子に対してのものであれば、まだ理解ができる。それとも、あの四ノ宮歌恋と

いう無邪気な少女はそういった危険分子の類であるということなのか……。

「それが、先ほどの君の質問に対する私の『答え』だ」

暫し沈思していたバルテルであったが、続くユリウスの言葉に佇まいを正すと、いつもの如く「諾^ヤ」と短く、だが忠実な返答をする。

ユリウスは、父であるデイトリツヒ・アドラー総統が病に倒れてから、近年、ブルーメンタール国内の王党派の動きが活発になったことを懸念していた。自身は与り知らないことながらも、ブルーメンタール王家最期の姫君である彼女の周辺には必ず国内の王党派と連動している人物が蠢いている筈だ。彼女、四ノ宮歌恋の背後を叩く必要がある。そのために、手腕と性格を見込んだ上でのニコラウス・バルテルという人選であった。

バルテルが執務室を退出するのを見届けると、傍らに控えていた副官のヴィンクラーが言葉を投げ掛けた。

「ユリウス様、先ほどバルテル少将が言いかけた四ノ宮歌恋の叔父という人物ですが……」

「解っている」

最後まで言い終えることを許さず、ユリウスはヴィンクラーの言を静かに遮る。

「……過去の栄光に縋る墓場の亡霊どもも何かと騒がしいようだ」

冥府の王はかくありきか、その声音はコキユートスのような冷たさでありながら、人を灼き尽くす焰のような感情に揺らめいていた。

「四ノ宮歌恋、そしてその周囲で飛び回る羽虫ども。日本でいる間は退屈せずに済みそうだが、ヴィンクラー」

長年の友であり腹心の部下に語りかける隻眼の元帥の傍らで、ビジネスデスクの上に置かれたデジタル時計は、もうじきにふたりの通訳者と約束した刻限、十時半を示そうとしていた。

「きゃあ、ベッドふつかふかー」

客室として宛われたデラックスルームに足を踏み入れた四ノ宮歌恋がまず最初にしたこと、それはベッドルームに設えられた豪華なセミダブルサイズのベッドにダイビングすることであった。靴も脱がず、スーツ姿のまま行儀悪くシーツの海に飛び込んだ歌恋は、自分の身体を受け止めるクツシヨンの衝撃、そして顔を埋めたりネンの清潔な香りと頬肌を撫る優しい感触を暫し楽しむ。

シーツに顔を半分埋めたまま、枕元のデジタル時計に視線を走らせると十時十五分を少し過ぎたところだ。指定された時間までに準備をしなくてはならない。それよりも叔父の檀に連絡を取ろうと歌恋は、むくりと身を起こす。

先にバルテル少将に預けていた手荷物は、すべてベッドルームの脇の応接スペースの傍らに丁寧に置かれていた。キャリーケースの上にはちょこんと積まれていたハンドバッグから、歌恋が携帯電話を取り出したところで、来訪者を告げるチャイムの音が鳴り響いた。

歌恋は弾かれたように顔を上げ、入口ドアのある方を見遣った。メールの着信があったことを告げる着信ライトが点滅しているのを視界の端に捉えながら　歌恋は手にしていた携帯をソファの上に投げ出し、急いでホワイエの向こうにある入口ドアに足を向けた。歌恋が玄関ドアを開けた先には、もうひとりの通訳者である桐島千咲が立っていた。

「四ノ宮さん、ちょっと良いかしら」

「あ、はい。どうぞ」

歌恋と桐島に宛われた客室は同じ構造のデラックスルームである。自身の部屋と同じ造りと訳知りにベッドルームに足を踏み入れた桐島であったが、早々と派手に窪んだベッドに気付くと、軽い頭痛のようなものを感じたのか、綺麗な指先でこめかみを軽く抑えて呆れたように溜息をついた。歌恋の行動パターンなどお見通しだと言わんばかりだ。

……また、怒られちゃうのかなあ……。

眉根を寄せて縮こまる駆け出しの通訳者を前に、桐島は気を取り直して、ワインレッドのルージュを曳いた硬質の唇を開いた。

「さっきのアドラー元帥に御挨拶した時の、あの態度は何かしら。

閣下のお顔をじっと見たりして。失礼じゃないの」
「すみません。……あの、考え事してて。ちよっとぼんやりしてしまつて……」

面を俯け、消え入りそうな声で事訳する歌恋だが、それ以上のことを言いようもない。初対面のユリウス・アドラー元帥に感じた不思議な既視感　しかもそれが自分が幼い頃から視ている夢に顕れる美貌の青年、死を司る王と同じなのだと、そんな話を桐島にした所で頭のおかしい子だと思われるだけだ。

……私だつて、何だかよくわかんないんだもの……。

お仕着せられたかのように冴えないリクルートスーツ姿の派遣社員は、それきり黙り込んでしまふ。そんな歌恋を前に桐島は、ふんと鼻先で嗤うと、苛立たしげにショートボブを髪を掻き上げた。

「まア、いいわ。それより四ノ宮さん、貴女も解つてるわよね。通訳者としてのキャリアは私の方が遙かに上だつてこと」

「はあ」

「アドラー閣下の通訳は私に任せて、貴女は私の邪魔はしないでちようだい。さつきみたいなことされたら堪らないわよ。いいわね？」
「……はあ」

立て板に水で桐島に捲し立てられて、歌恋は芸のない相槌を打つ

ことしかできない。

「言いたいことはそれだけ。……さ、準備は出来たのかしら？ もうすぐ十時半よ」

廊下で待つてるからと、踵を返した桐島が足早に客室を出て行く、入口ドアの締まる音がホワイエの向こうから妙に高く響いて歌恋には聞こえた。

徐に歌恋は支度を調える。革のカバーがかかった分厚いスケジュール帳と筆記用具をハンドバッグから取り出し、そして、先ほどソファの上に投げ出したままであった、着信ランプの明滅する携帯電話を歌恋は改めて手に取った。

着信メールは叔父の四ノ宮檀からのものであった。仕事を頑張るように、それから何かあったらすぐに連絡してくるようにと言った、いつも通り、歌恋には甘い、心配性の叔父らしい文面が綴られていた。

「自信なくなっちゃいそう……」

叔父からのメールにぎつと目を通した歌恋は、ぱたんと少し大きな音をたてて二つ折りの携帯を閉じると、肺腑の空気すべてを吐き出すかのような盛大な溜息を吐いた。

歌恋は落ち込んでいた。先程、桐島千咲に釘を刺されたのもあるが、ユリウス・アドラー元帥や副官のヴィンクラーといった要人を相手に、あれだけ堂々とした立ち居振る舞いを見せる彼女と引き比べて自分は……と、考えていたのである。

どんなに高スキル、高キャリアの通訳者であろうと厳しい審査や面接を何度も受けさせられたのが、歌恋だけは書類審査だけで採用になった例外であるのだと、桐島は言っていた。だが。

「……私が雇われたのって、何かの間違いなんじゃないかしら」

革製の分厚いスケジュール帳を手に入口ドアへと歩を進めながら、歌恋はぶつぶつと埒もないことを口にしてみる。ホワイエに反響する、大学を卒業したばかりの駆け出し通訳者の独白に答えるものはなかった。

∧ 2 3 2
| 4 0 3
| 4 0 3
| 4 3 0
∨ 2 3 2

3 (後書き)

第1章完です。詳しくは活動報告にて…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6781t/>

冥府の王は恋を謳う

2011年9月29日03時22分発行